② 模擬株式会社　IMAKANE　FACTORYにおける指導の在り方に関する考察

今年度の模擬株式会社　IMAKANE　FACTORYの取り組みにおいて、生徒に対するアンケート調査の結果を分析した結果を踏まえ、模擬株式会社　IMAKANE　FACTORY の指導において、最も生徒の変容が得られた事例に基づいて、指導の在り方を次のとおり検討、整理した。

模擬株式会社における指導の在り方 （作業学習は「会社の仕事」であるとの認識を持つ）	期待される効果
・一学級を一つの組織として動かす。 ・これからの予定を提示して、生徒がどのときに何をやるのか計画を立てるようにする。具体的には、生徒が仕事の見通しを立て、終了期日を基に、製品１つあたりの時間と残り時間を考えた仕事の取り組みをする。生徒だけでなんでも進められるようにする。 ・組織図を使って、作業の全体量と分担、自分の担当業務が終わった後、だれにどのような協力をするのか、生徒が考えるよう促し、卒後の職場を想定した動き方で生徒が活動できるようにする。 ・業務量の全体調整は生徒が話し合って行う。 ・時間内に片付けや掃除を終わらせるように意識付ける。 **「教師の指示を待って行う教師主導型作業学習」** **⇨「組織図を使って作業内容の全体量と個々の生徒の担当と分量が分かり、活動の意味理解の上に立った生徒が主体的に『会社の仕事』としてペアやグループを作って組織的に取り組む作業学習」を実施する。**	・周りの援助がなくても動けるようになり自分のできることとできないことの区別ができるようになる。 ・作業の見通しを毎日書くようになり、製品１つを作ることに必要な時間が分かり自分の仕事のペースをつかむことができる。 ・どのような意味があり、なぜ大切なのかも授業の中で学ぶことで、意味を理解して動けるようになる。 ・仲間とペアやグループを作って、会社の組織同様に動くことで、自分はどの立場にいてどんな仕事があるかすぐに分かるようになる。 ・全体のことをしっかり把握するために、自分から仲間に聞いて分かるようになる。 ・理解していることで、仕事が早く終わること、どんなときも理解していた方が、動きやすいことを理解する。
・受注生産を増やし、発注者との打合せを行い、求められる規格に合う製品を製造するなど、製造過程で顧客とのやり取りのある製造を基本とする。不特定多数を対象とする場合には、市場調査を行って製造する製品を決める。	・会社の仕事としての意識を持ちやすく、職場での動きを想定した学習になる。
・学級を２グループに分けて仕事をするなど、卒後の職場をイメージできるようにする。 ・各教科の目標を書いて、できるようになるための手立てを考える。 ・自分の障がいと向き合う時間を設定し、自分のよさや課題を考えるよう促す。 ・今日の自分の給料はいくらになるか自己評価して計算して、給料を増やすための行動、仕事をする。 ・作業だけではなく、今日１日の振り返りを行い、作業もその他の学習や生活も社会人になる準備を行う。 ・作業学習中にメモを取るように促し、寄宿舎の自習時間でメモを必要に応じて整理する。	・職場での就労をする上で大切な観点を持って仕事を振り返ることができる。 ・自分自身の障がいとよさに気付き、自分自身をありのままに少しずつ受け入れることができるようになる。 ・効果的な振り返りを行うことができ、自分の障がいや課題を受け入れ、自分のよさと改善策に気付くことができる。
・ＰＤＣＡサイクルノートを作り、振り返るの際には、Ｐ、Ｄ、ＣＡの各段階で何が良く、どこに課題があり、今後はどのように改善すると良いのか考えるように促す。	・自己の失敗のパターンに気付き、考え方や行動を修正して、失敗しないように努力することができる。

模擬株式会社における指導の在り方 （作業学習は「会社の仕事」であるとの認識を持つ）	期待される効果
・作業における課題と教科学習や他の指導における課題を関連付けて、生徒に意識付け、課題解決努力を促す。 ・作業を会社の仕事と考えて、製品を丁寧に、期日まで終えるように意識付ける。 ・発注者のことを考えて、丁寧に作ったり形やデザインにこだわって作るように促す。 ・新製品や新しい作業種を開発して、製品知識を増やし技能を高める。	・購入者に喜んでもらえる嬉しさを感じ、仲間とコミュニケーションをしながら確実に仕事をしたり、より質の高い製品を作るために質問したり、調べたりする。
・会社として何が必要なのか考えるように促す。	・会社として仕事をすることにより、自ら会社の業務や仕組みを調べ、提案する。
・報告・連絡・相談をどんなときでも行う。	・報告・連絡・相談も仲間や先生にするときの仕方を知ることができる。 ・報告・連絡・相談をどんなときでも使うことで、上司や周りの人が気持ち良く仕事ができることや人間関係が良くなることを学ぶことができる。
・作業学習で用いる考え方を教科指導においても関連付けて学習できるようにする。 （例） ・ 数学 「５０枚お皿を作る場合、合計何グラムの粘土の準備が必要か。」、「３０枚お皿を受注した場合、どのように仕事を分担すると平等かつ確実な仕事ができるか。」、「○月○日の締め切りにはどのような時間配分や作業量で仕事をしなければいけないか。」など、数学の時間で問題を解いた後に作業学習に取り組む。 平均の出し方を数学で学習し、その後の作業学習では仕事を平等に割り振るということを基本として、誰か一人にだけ負担がかかっていないかなどという視点と実際に誰がどう動くと効率が良いのかという視点で考えるように促す。 ・国語 「報告・連絡・相談の各場面で誰にどのような言葉で伝えることが望ましいか。」、作文では、「文章表現や誤字脱字をグループでチェックし合い、整った状態の物を提出する。」といった組織図を生かすとともに、確実な仕事をするという意識と習慣をつけるための授業の工夫を行った。 **他教科の授業でも作業学習の内容と関連付けて、「会社の仕事」を学ぶ場と押さえ、指導内容を構成すると、卒後の職場で活用できる知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習（仕事）に取り組む態度を育成できる。**	・作業がやりやすくなった。

（２） 模擬株式会社の取り組みの課題

① 会社としての意識付け

生徒によっては、会社意識が十分ではない場合があるため、社会とつながりがあり、発注先とのコミュニケーションが必要な「受注生産」を効果的に作業計画に位置付ける必要がある。

受注を増やすためには、今金町の「ふるさと納税返礼品」に学科の製品や開発商品を提供していく。

② 商品管理システムの運用の充実

学科の製品を製造しても、学校祭間際には「今養版商品管理システム」を運用できない場合があり、製造した後の商品管理という社会における一般的なシステムを学科作業に確実に位置付ける必要がある。したがって、作業学習を単元化して、特定の製品を製造を終了したその都度、商品管理システムに登録して入庫し、販売会の前には出庫する作業を生徒が行えるようにする必要がある。

③ 市場調査を踏まえた製品製造と販売会の実施

これまでの製品製造は、長年製造してきた定番商品を基本としているが、市場調査を学校祭の販売会ではアンケートの形式で要望を調査したため、これを踏まえた不特定多数向けの製品を製造、開発する必要がある。

④ 新製品・商品開発の充実

生徒の実態の多様化を踏まえるとともに、地方創生を担う人材育成のため、関係機関と協力したコラボ型新製品や新商品の開発を継続して推進する必要がある。

⑤ 他の教科と関連付けた教科横断的指導の充実

国語・数学等の教科学習は、作業と組み合わせた指導内容・方法となっていない。例えば、作業量の平均化に気付くことができるように、事前に数学で「平均に関する学習」を行い、作業学習で考える際の思考ツールや考え方を活用できるように、作業学習における課題と関連付けて教科の年間指導計画を作成する必要がある。

⑥ 会社そのもの関する学習

会社の業務、商品管理、帳票、市場調査など商業ビジネスの基礎を作業学習のシラバスに単元として位置付けて作成し、指導する必要がある。

⑦ 学科共通作業で環境整備や流通・サービスを行う学習の充実

校内での学習を行って業務に必要な技量を身につけて、目的や課題意識を明確に持った校外作業を行う必要がある。作業後は、可能な範囲で他者からの評価をもらい、目的の達成状況について振り返りを必ず実施し、次の学習や生活、学科共通作業の改善に生かす。

⑧ 仕入れ販売の充実

仕入れ販売の目的やポイント、販売して利益を上げる過程が分かるような学習過程を組む必要がある。

実践事例１

模擬株式会社　IMAKANE　FACTORY

～「社会に開かれた教育課程」と「協同学習」の活用～

１　模擬株式会社設立の主旨

生徒自らが社会で働くために必要な準備とは何かを考え気付くようになるためには、ほめられたり感謝されたりする機会を増やし、生徒の自己有能感が高まる場面設定が必要になる。そこで、社会で働く上で何が必要なのかを気付く機会として、校外での作業や現場実習を計画的に設定する必要がある。特に、校外で行う受注作業は、地域の関係機関の業務を補助する活動として、スタッフの一員に準ずる存在として作業の精度を上げることにより、関係機関の職員や町民から感謝されることが、生徒の自己肯定感や自己有能感を高めると考えられる。

生徒は福祉的就労も含め、組織が目指す目標や収益の向上に向かって努力することが求められることから、収益を上げることを意識した学習活動の枠組みを設定することが重要になる。

卒業後の職業生活への円滑な移行を図るため、卒業後の職業生活に類似した環境として、全生徒が一人５００円の出資金をＰＴＡから受けて模擬株主及び社員となって、「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY」を設立しました。模擬株式会社では作業学習や受注作業、販売等について、「会社の仕事」として業務を行うとともに、仕入や商品管理、販売・会計のプロセスを体験する学習を行う。

２　模擬株式会社設立総会

平成２９年６月７日（水）に、模擬株式会社設立総会が全校生徒参加の下、行われた。はじめに、総務部担当教員が生徒に株式会社設立の目的と定款、組織図、学習計画、予算などについて説明した。次いで、各学科の代表生徒がそれぞれの学科の特色や取り組みについて説明し、今年度の計画を決定した。

模擬株式会社設立総会

窯業科・産業科の取り組みの説明

３　模擬株式会社における窯業製品の生産の工夫～「協同学習」を活用して～

３年産業科では、総会後に改めて株式会社とはどのように成り立っているのか、仕事やお金はどのように生まれるのかを説明する授業を行い、それを実感できるよう、その後の作業学習では、作業の目的や作業グループ、作業担当者氏名や作業分担、作業の流れなどを示す「組織図」を用いて作業学習を進めた。

(1) キーマカレー用の楕円皿の受注と生産

ＮＨＫ室蘭放送局内のカフェから､キーマカレーやホットサンド用の楕円皿の製作を受注した。カフェの運営を委託された鶴羽佳子氏（北海道教育委員会教育委員）が、キーマカレーなどのプロデュースを料理家の黄川田としえ氏に依頼し、使用する皿も探すことになった。黄川田氏が打合せの際に、鶴羽氏が持っていた本校生徒の作品の方がいいという結論になり、受注が実現した。

本校では、平成２７年度から「アクティブ・ラーニング」の一つである「協同学習」について

全校研究で取り組んでおり、普段の作業学習の授業においても「協同学習」の方法で話し合い、課題解決する授業を展開している。

今回の受注生産でも、受注品の生産方法を話し合って、「組織図」を活用してお皿の担当や商品チェック係を決めたり、報告する際の連絡系統を話し合って決めたりしながら製品生産を進めた。生産に当たっては、カフェから提示いただいた料理の盛り付け写真を参考にしながら、次の点に注意を払って試作を繰り返した。

① 楕円皿の用途を考え、お客様が望んでいるお皿の形になるように、粘土の厚さと形がきれいになるための乾燥の方法について条件を変えて試作しました。
② 製品を製作する日が変わっても一定の品質を保つために、各製品を作るに当たって必要な知識を確実に学ぶことや複数のチェック係による検品、作った全ての製品の数と納品できる数などを把握するための商品管理を行いました。

その結果、「お客様に満足していただける商品」を全員が意識しながら各担当が責任を持ち、確実な仕事をすることができた。また、よりよい仕事をするためにＰＤＣＡサイクルで作業を進めることの大切さを生徒に実感させながら授業を進めることができた。

製作した楕円皿

(2) 飲食店用の大皿の受注と生産

２回目の受注作業として、町内にある飲食店やその関係店（札幌市内）から大皿の製作を受注した。「組織図」を利用して、各生徒の仕事の分担を明確にするとともに、１回目の受注品を納品するまでの過程でよかった点や改善点を話し合った結果に基づいて、人数配置の改善をしたり、製品の精度を上げるためにダブルチェックできる体制にしたりするなどの改善を行って、受注品の製作に取り組んだ。

「組織図」は、作業の目的や作業グループ、作業担当者氏名や作業分担、作業の流れなどを分かりやすく示した構造図である。例えば、生徒を「釉薬がけ」担当者と「修正」担当者に分けて、前者は「組織図」の上方に、後者は下方に氏名札を配置し、作業分担と担当者氏名、作業の流れなどが分かるように、項目と項目を線で結ぶ。

この「組織図」を示して作業の目的や流れの理解を促し、生徒全員が「お客様に満足してもらえる製品を作る。」という共通の目的のために作業に参加し、お客様を想像しながら、社会の中で働くという意識を持てるようにしている。

作業学習では、「協同学習」の考え方で授業を展開し、「個々に与えられた責任を果たすことで全体の仕事が成り立っていること」、「自分の仕事が終わったとしても、全体の目標が達成されていなければ仕事は完成していないからこそ、周りのために動かなければいけない。」という協働の考え方が身につくように取り組みを進めた。

製作した大皿

4　模擬株式会社における窯業製品の生産の成果

よりよい製品を生産することができる「よい仕事」をするために、ＰＤＣＡサイクルを生徒に実感させながら授業を進めることができた。

成果としては、次の点が挙げられる。

(1) 生徒の生産に対する考え方の変容

「自分の目標の達成や成長のために努力した結果、お客様のためになる。」という考え方から、「お客様のことを考えた上で、組織の中で自分はどのような役割を担わなければいけないのか。」という考え方に変化してきた。

(2) 正確でより深い知識や技術の習得意欲の向上

今までに比べ、知識や技術を習得しようという意識が高まり、自分が得た知識を作業ノートにまとめ直したり、授業以外の時間に技術面のアドバイスを教師に聞きに行ったりする場面が多く見られるようになった。

(3) 障がいの自己理解と長所を生かした責任ある業務遂行の意識化・行動化

「組織図」や「〇〇担当」など、自分の働きが会社にどのように貢献できるかを実感できるようになってきたことにより、「自分の障がい特性を理解して、手立てを考えること」や、「長所をどのように生かすか」など、責任を持って取り組むために自分ができることを試行錯誤するようになってきた。

(4) チームとしての人間関係の深まり

学科の一員という意識から、「自分は会社の一員である。」という考え方ができるようになってきたことにより、学級の仲間意識が強くなり、「チームで仕事をする。」「チームで活動する。」というチームワークの意識が高まってきた。

今後も、卒業後が本番ではなく、「既に社会人である。」という意識を持ち、成長に向けて毎日を過ごすことができるよう、指導者としても試行錯誤していきたい。

（３年産業科担任　鐘ヶ江　真知）

実践事例２

外部の専門家と連携した製品開発

１　外部の専門家と連携した製品開発の主旨

窯業科では、同じ規格の製品を正確に数多く生産することができる作業能力の育成を目指し、釉薬を製品全体にかける方法を基本として製品を生産してきた。しかし、課題としては、一人一人の生徒の個性が生かされた製品生産ができないことや消費者のニーズに応えられる製品の種類の拡充が課題となっていた。

そこで、平成28年度から作業学習において、地域の陶芸作家による絵付け技法を導入し、年3回程度学年ごとに直接指導を受けながら､消費者ニーズに沿った新製品を開発する作業学習を行った。

２　障がい者アートとしての製品作り（平成２８年度）

函館市在住の陶芸作家である石川久美子氏（本校学校評議員〔平成２９年度～〕）を講師として、指導を受けながら新製品の開発を行った。

(1) 幼児向けの新製品開発の工夫

新製品開発のターゲットを幼い子どもに合わせ、幼児に好まれる絵柄を陶芸用クレヨンを用いた絵付け技法を用いて、製品に絵付けを行った。

絵付け作業

ドリア皿

(2) 幼児向けの新製品開発の成果と課題

①　成果

・学校祭の販売会では、動物の絵柄を絵付けしたドリア皿が一番早く完売し、幼い子供のいる主婦の方々やお孫さんに買い求める年配の方々から好評をいただいた。その他にも、約10種類の製品を出品したが、短時間で完売した。

・消費者のニーズを考えて、どのような製品が売れるのか考えて、絵柄と絵付けの方法を工夫した結果、学校祭の販売会ではお客様から好評をいただき、短時間で完売したことにより、生徒の達成感や自己有能感が高まった。

・使う人の使い勝手や好まれる絵柄を考え、絵付けの方法を工夫することにより、消費者が求める内容に気付き､ニーズに応えられるよう作業に集中して取り組むことができるようになった。

幼児向けの新製品

② 課題

・陶芸用クレヨンを用いる絵付け技法では、生徒の実態によって絵付けが可能な生徒と難しい生徒がいるため、全員が製作に参加できない場合があった。

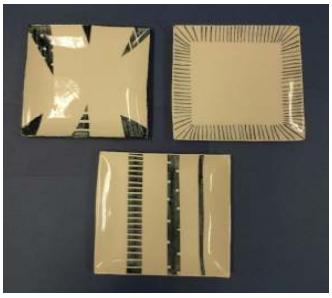
・絵柄に個性が出すぎてしまうため、会社としては可能な限り同じ製品を製作するという正確性を求める学習の場合にはそぐわないという課題があった。

３　流行を取り込んだ誰でもが生産できる新製品作り（平成２９年度）

講師の石川久美子氏から、伝統的な顔料である「呉須」を使って、最近の流行となっているボーダーや三角の絵柄の絵付けの技法などを学び、新製品を開発した。

(1)「呉須」を使ったボーダー柄等の絵付けを行う新製品開発の工夫

絵付けは前年度の反省を生かし、今年度は昨年度から引き続き指導いただいたマスキングテープを使った技法を用いて新製品を開発した。この技法を使うことで、どの生徒も製品作りに参加でき、生徒全員がある程度同じ製品を製作することができるようになった。また、陶芸品の最近の流行から売れ筋商品の絵柄や絵付け方法として、「呉須」を使ったボーダー柄等の絵付け方法を講師から学び、新製品の開発に取り組んだ。



ボーダー柄等の絵付けを行った新製品

講師による授業

(2)「呉須」を使ったボーダー柄等の絵付けを行う新製品開発の成果と課題

① 成果

・どの生徒が作業を行っても、ある程度同じ絵柄の製品を製作することができるようになった。

・作業工程の内容から分業制で生産することが可能であり、「協同学習」の方法を用いて、１枚の皿の作業工程の内容をどのようにするか話し合った。その結果、生徒は３人程度のチームで協力して完成させる作業工程を作成した。具体的には、「同じチーム内でも細かな作業が難しい生徒はマスキングテープを貼る。」、「細かな作業が得意な生徒は筆を使う。」、「慣れてきたら役割を交代する。」などの分担と３人程度のチームで完成させる工程を考えた。

・全員が絵付け作業に参加し、自分の役割を持ち、協力し合うことで絵付けを完了することができた。

・講師の石川久美子氏との情報交換の中で、昨今の流行の情報を取り入れることができ、消費者ニーズに沿った新製品作りを行うことができた。

・講師が実際に目の前で絵付けをしていく様子や、完成した皿を見た生徒からは「格好いい！すごい！」という驚きの声が上がった。実際に目の前で完成していく様子を見ることで生徒の興味・関心を引き付け、自分たちも作ってみたいという気持ちを高めることができた。

・初めて呉須を使ったデザインに挑戦したことや、全員が製品作りに関わったことからも、「焼き上がりを早く見たい。」と口々に話す生徒の様子から、強い期待感をもって新製品を開発することができた。

・学校見学に訪れた町内の方々から、「今までにない雰囲気の新製品である。」と驚きと期待の声が寄せられた。

② 課題

・陶芸作家の専門的な技術をどのように生徒の製作活動に反映させるかいうことが今後の課題となった。

・自分たちの作った製品がどのように社会につながっているのかを生徒が実感できる機会を意図的に数多く設定することが課題となった。

４　外部の専門家と連携した製品開発の意義

(1) 外部の専門家と連携することにより、消費者のニーズを把握して、購入層を絞り込んだ新製品開発を行うことができた。

(2) 陶芸品の流行に応じた専門的な釉薬や技法を習得することができた。

(3) 生徒はどのような人に使ってほしいのかを想像して製品作りを行うとともに、直接販売を通してお客様の反応を実感することができ、「お客様に喜んでもらえる製品作りをしたい。」という学習活動に対する動機付けを高めることができた。

(4) 生徒が自分たちの作った製品がどのような人の手に渡り、どのように使われていくのかについて知ることにより、自分たちが社会の一員として働いているという実感をもつようになった。

11月に行われる学校祭での販売会で、お客様の反応を実際に体感することや製品の販売数から、生徒の学習の成果を振り返り、今後の学習につなげていきたいと考えている。

（３年産業科作業担当　亀田倫代）

実践事例３

外部の機関と連携した商品開発

１　外部の機関と連携した商品開発の主旨

「社会に開かれた教育課程」としては、教科横断的な視点を持って育成を目指していくこと、地域と連携・協働して、地域全体で未来を担う子供たちの成長を支え、地域を創生する活動を「地域学校協働活動」として推進することが重視されている。

そこで、本校では、学校所在地の今金町の地域特性を活用し、地域が抱える課題の解決に挑むとともに、地域の学校や人々との交流を通じて、地域創生の実践者であり、共生社会の担い手を育成することを目指している。

本校家庭総合科（１年生）は、北海道八雲高等学校総合ビジネス科（３年生）と交流及び共同学習を通じて、「今金町の定番土産商品」となることを目指して、「ショコラクッキー」を開発した。この取り組みは今金町内の社会福祉法人光の里の「多機能型事業所ワークショップいまかね」と連携した取り組みであり、「高等学校・高等養護学校・社会福祉法人」との連携・協働による商品開発である。

２　社会福祉法人と連携した商品開発（平成２８年度）

本校の創立２０周年記念事業のうち、本校生徒会の取り組みの一つとして、「記念菓子」を開発して、創立２０周年記念式典で配付することとした。開発に当たっては、多機能型事業所ワークショップいまかねと連携し、将来的には「今金町の定番土産商品」となることを目指し、「記念菓子ショコラクッキー」を開発した。

(1) ショコラクッキー開発の工夫

生徒会執行部の生徒が、夏季休業期間中にクッキーの形や味のイメージ、そして、型抜きによるのか、手作り感のある方がよいのか、色鉛筆で彩色したイメージ画を複数考案した。ワークショップいまかねが、生徒の考案した複数の案に基づいて、複数の候補を製作し、生徒が試食して最終的なプランを決定しました。

デザインは円形にハート型が入るデザインとし、味はホワイトチョコレート×イチゴ（ハート部分）の１種類とした。商品名は「清流の薫り」とし、パッケージデザインは仮のデザインを作成した。

完成したショコラクッキーは、創立２０周年記念式典で記念品として配布された。その後は、本校の学校祭で販売して完売した。また、平成２９年２月に今金町で行われた第３６回北海道障害者冬季スポーツ大会では、選手や参加スタッフに記念品として配付された。

ショコラクッキー「清流の香り」

(2) ショコラクッキー開発の成果と課題

①　成果

・生徒会執行部の生徒が考案したクッキーが、創立２０周年記念式典や学校祭、第３６回北海道障害者冬季スポーツ大会で配付・販売され、好評を得たことにより、生徒は地域を意識した商品開発に手応えとやりがいを感じることができた。

・創立２０周年を記念する生徒の主体的な活動を記念すべき年度に展開することができた。
・本校の教育活動や生徒への地域の理解・啓発を図ることができた。
・今金町の定番土産となることを目指した商品化への第一歩となる商品開発を行うことができ、関係機関との連携・協働がスムーズに行われるようになった。

②　課題

・一般商品として販売する上では、味の甘さが人によって評価が分かれるため、購入層を想定した商品の質の向上が課題となった。
・幅広い世代に好まれる味作りのため、同年代の高校生と協力して幅広い視点から商品開発を行うことが必要となった。
・商品パッケージが仮のパッケージのため、購入層が手に取りやすい商品パッケージを考案する必要があった。
・創立２０周年記念事業における生徒会の取り組みとして開発したため、今後は商業科のマーケティングの基礎として指導を段階的に行う必要があった。

３　高等学校と連携した商品開発（平成２９年度）

商品開発と販売に実績があり、隣町に所在する北海道八雲高等学校総合ビジネス科と交流及び共同学習を通じて、新しいショコラクッキー「チョコっと　ひといき。」を開発した。

(1) 新しいショコラクッキー「チョコっと　ひといき。」開発の工夫

①　商品開発の方向性の決定

５月に製造を担当するワークショップいまかねとの打合せ行い、北海道八雲高等学校と連携しながら、次の方向で商品開発をしていくことを決定した。

①　味も新しくする。 ②　商品名も「清流の薫り」から、味を変えることに合わせて新しくする。 ③　パッケージデザインも考案する。

次いで、５月に北海道八雲高等学校総合ビジネス科との打合せを行いました。

①　ワークショップいまかねと確認した３項目で商品開発する。 ②　両校がそれぞれにアイデアを考え提案し合い、最終案をワークショップいまかねへ提案する。 ③　両校生徒が交流及び共同学習を行い、意見交換できる場を設ける。

併せて、今後の方向性として、次の３点も確認されました。

①　北海道八雲高等学校でも、北海道高等学校長協会商業部会が主催する「北海道高等学校商業教育フェア」（以下、「商フェア」という。）等で販売する。 ②　両校の名前をパッケージに入れる。 ③　北海道八雲高等学校では、総合ビジネス科の３年生の「総合実践」の授業で交流及び共同学習を実施する。

②　商業科のマーケティングの基礎に基づいた商品開発

１年家庭総合科の作業学習の食品加工の題材として、４月から商品開発を開始した。総合ビジネス科と共同開発するということもあり、商業科のマーケティングの基礎を生徒の実態に合わせた形で指導しながら、商品開発を進めた。

これらの検討は、教師がテーマを提示し、生徒がそれぞれ案を考えて持ち寄り、作業学習の時間に「協同学習」を活用して、生徒が話し合いを行い、案を練った。生徒の話し合いでは、

「商品企画会議」という会議名をつけ、話し合いのルールを「１明るく　２笑顔で　３ブレインストーミング」の３点に設定した。

これらを守って活発に議論するよう生徒を促した。話し合いが進むと言葉がきつくなる場面もみられたが、生徒は「アイデアを考えるのは難しいけど、またやりたい。」「話し合いをしていると、笑顔がなくなってしまうので気をつけたい。」などの感想を話しながら、前向きに取り組んだ。

ア　購入対象となる消費者層（ターゲット）の検討

はじめに、購入対象となる消費者層を検討しました。販売場所は本校学校祭と商フェアの２箇所として大別した。

・学 校 祭：女性３５歳から４９歳（Ｆ２）
・商フェア：女性２０歳から３４歳（Ｆ１）

これは、縫工製品の製作に向けて生徒が行っていた市場調査のデータを生かしたものである。家庭総合科の１年生８名が、５月に学校や寄宿舎で上級生や寄宿舎指導員から学校祭の様子を聞き、来校者は主に保護者と先輩たちということを調査することができた。そのデータから、ショコラクッキーに興味を抱いてくれる人を選定した。商フェアは、新さっぽろサンピアザ（札幌市）で行うため、そのショッピングセンターを良く知る教員を対象として、来店者の客層を調査した。本校生徒はコミュニケーションを課題とする生徒が多いため、上級生や大人に話を聞くこと自体に大きなハードルがあった。そこで、各々が話しやすい相手を探し、情報を入手するとともに、情報の取捨選択も行うことができた。

イ　味の組み合わせの検討

次に、味の組み合わせを検討しました。使用可能なチョコレートは「①ホワイト　②イチゴ　③抹茶　④カカオ」の４種類があり、これをクッキー生地に合わせてショコラクッキーを作ることとした。味の組み合わせは、土産物店で販売されている類似商品を実際に食べ、おいしいと思うものを選び、「迷ったときには、ターゲットが好むものは何か？」という観点で最終案を決定した。最終案は、「①抹茶＋ホワイト」、「②ホワイト＋イチゴ」、「③ホワイト＋カカオ（ビター）」の３種類となった。

試食・検討①

試食・検討②

ウ　商品名の検討

生徒それぞれが数点の案を出し、全３４点の案を基に話し合いを行い、最終案を次の３点とした。

①　しっとりチョコレートクッキー　ｃｈｏ・ｃｏ・ｒｏ
②　チョコっと　ひといき。
③　ひといき　ｃｈｏ・ｃｏ・ｒｏ

エ　パッケージデザインの検討

商品名と同様に生徒が一人一人手書きの案を出し、全３４点の案を基に話し合いを行い、味のイメージに合わせて、「ハート」や「風船」などのイラストをデザインした３点を最終案とした。

オ　プレゼンテーションの作成

検討した３項目の最終案をスライドにまとめ、プレゼンテーションの資料を作成した。スライド作成の基本構成は教員が行い、スライドも発表原稿も 細かな修正は生徒が役割を決めて責任をもって資料を次のとおり作成した。

プレゼンテーション画面①

プレゼンテーション画面②

③　北海道八雲高等学校との共同開発

北海道八雲高等学校総合ビジネス科３年生１８名の「総合実践」の授業時間に本校生徒が参加し、交流及び共同学習による商品開発を行った。

ア　第１回交流及び共同学習

本校生徒はかなり緊張していたが、交流校の３年生のきめ細かな配慮のおかげで、スムーズに話し合いが行われた。両校から開発商品について、プレゼンテーションがなされ、その後は両校合わせて４グループに分かれ、３項目について意見交換を行った。

プレゼンテーション

意見交換

イ　第２回交流及び共同学習

２回目の交流及び共同学習では、本校生徒は前回の経験を生かしてスムーズに話し合いに参加することができた。前回と同じグループで話し合いを再開し、各グループで最終案を次のとおり決定した。

1　味の組み合わせ

・３種類（①　ホワイトにイチゴ　②ホワイトに抹茶　③カカオにイチゴ）

・味の組み合わせのポイント

①　イチゴの酸味＋ホワイトの甘味

②　抹茶の渋み＋ホワイトの甘味

③　子供も食べやすい。見た目によい。

・味付けの基本

★ホワイトを基準として２種類用意する。カカオはビター、抹茶は渋めがよい。

★若い女性が好む（F1：女性20-34、F2：女性35-49）。

2　商品名

・２種類（①チョコっとひといき　②チョコっとひといきクッキー）

・商フェアの顧客は年配の方が多く、子供もいるため、シンプルが良い。

・イタリア語やドイツ語の「ショコラーデ・ビスコット」もあったが、分かりづらい。

・「クッキー」を入れると分かりやすいと思うが、意見が分かれた。

3　デザイン

・２種類（①縦型　商品名のみ　②四隅にハート）

・背景を透明にして商品が見えるようにした。

・クッキーの４種類の色が入っている。

・ハートがモチーフになっている（クッキーのデザインより）

④　ワークショップいまかねへのプレゼンテーション

ア　プレゼンテーションの作成

北海道八雲高等学校でのプレゼンテーションの作成と同様に基本形を教師が作り、生徒がパソコンを操作してスライドの細部を作成した。前回よりも生徒たちだけで行える範囲が広くなり、スライドの細かな部分にも気をつけて作成することができるようになってきた。

イ　ワークショップいまかねでの提案

６月末に本校生徒８名が、ワークショップいまかねを訪問して、最終案を提案した。

プレゼンテーション画面①

プレゼンテーション画面②

戸室孝俊施設長からは、「味の細かな点にも提案していただいたので、製造しやすい。」「分かりやすい発表でした。」と賞賛された。

ワークショップいまかねへのプレゼンテーション

試作パッケージ

試作品

⑵ 新しいショコラクッキー「チョコっと　ひといき。」開発の成果と課題

① 成果

・生徒は商品開発のアイデアを考えることの難しさを感じた一方で、商品開発の楽しさややりがいを感じるようになり、商品開発の意欲が高まった。

・生徒は話し合いをしているうちに、意見がまとまらず、笑顔がなくなってしまう場面もみられたが、そのことを受け止めて、「気をつけたい。」など、前向きに取り組むことができるようになった。

・高校生との交流及び共同学習において、話し合って案をまとめることにより、コミュニケーション力や意欲の向上が図られた。

・福祉施設職員への提案を通じて、未経験の場でもプレゼンテーションやコミュニケーションを図ることができた。

② 課題

・今後は、販売を含めた生産管理や次年度の発注計画を考えるなど商品開発の学習を継続して行うことが課題となった。

・販売場所については、より多くの人に商品を知っていただくために、商フェアや学校祭以外の販売場所で販売を計画することが課題となった。そこで、町内のホテルでの販売を模索して、平成２９年１２月から今金町内のホテルで各部屋の茶菓として提供される他、ホテルの売店でも販売されている。また、社会福祉法人光の里が運営するアンテナショップでも販売されているが、販売先の拡充が課題となっている。

・北海道八雲高等学校は、八雲町の「スイーツフェア」に出品してほしいと依頼を受けており、本校は「今金町ふるさと納税の返礼品」に加える方向で検討を進めている。

（家庭総合科主任　小林和幸）

実践事例４

地域学校協働活動としての受注作業（委託）

１　地域学校協働活動としての受注作業の主旨

通常の学級に在籍する発達障がいのある生徒が中学校時代に不登校となり、本校に入学してくる事例が増えてきている。このような生徒は口頭言語能力や知識に比べて社会性の発達に遅れがあるため、障がい認識が進まず自分自身の自己像と実際の働く力とはギャップがあり、現場実習そのものに高いハードルを感じ、精神的につまずきやすい傾向がある。

そこで、生徒がほめられたり感謝されたりする機会を増やし、生徒自らが社会で働くために必要な準備とは何かを考え気付くようにするためには、社会で働く上で何が必要なのかを気付く機会として、校外での作業や現場実習を積極的かつ計画的に設定する必要がある。校外で行う受注作業（地域との協働活動）は、地域の関係機関の業務を補助する活動であり、スタッフの一員に準ずる存在として作業の精度を上げることにより、関係機関の職員や町民から感謝されることが、生徒の自己肯定感や自己有能感を高めるとともに、生徒がより一層地域に溶け込むことにつながる教育効果の高い教育活動である。同時に、関係機関の職員や町民は、障がいのある生徒との接し方を活動を通して自然に学ぶことが可能となるのみではなく、生徒が地域コミュニティーを支える存在となることにより、卒業生が地域に溶け込んで町民との交流を楽しみながら就労する「共生社会の実現」に資することができると考えられる。

今金町では、「今金町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン及び総合戦略」（２７年度～３１年度）の基本戦略の第一位に「障がい者が地域産業の担い手としての活躍の場づくり」を挙げており、地域との協働活動は「共生社会の実現」を目指す国や道、町の施策とも合致する。

そして、新学習指導要領では、地域の公共システムにおけるコミュニティーの拠点として、よりよい教育でよりよい社会を作ることを地域と共有する「社会に開かれた教育課程」であることが求められる。

地域の関係機関の業務補助を行うことは、生徒の社会経験の拡充と実践的な働く力の獲得に資するばかりではなく、地域コミュニティーの拠点としてよりよい教育を地域と共に作り、よりよい社会を作ることにつながる。

２　町内会配布物仕分け作業、公共施設等の環境整備（平成２８年度）

今金町役場が行う町内会配布物の仕分け作業、公共施設の環境整備に取り組んだ。

(1) 町内会配布物仕分け作業

①　町内会配布物仕分け作業の工夫

今金町役場からの受注作業として、町内会配布物の仕分け作業を２学期から、毎月２回（第１、第３木曜日）程度実施している。各学科から、４、５名単位で学科の作業学習とのバランスを考えながら、輪番で仕分け作業に参加している。町内会の班ごとに配布物を戸数分だけ仕分ける作業は、間違いはやり直しにつながるため、正確な枚数の確認と仕分けた結果の点検が必要になる。

役場職員とのふれあいや関わり合いを重視して、コミュニケーションを相互に取る場面を設けるとともに、作業の手早さや正確性の確保のために、役場職員と本校生徒がペアを組み、役場職員とのコミュニケーションを図りながら、手早さに加え、正確に枚数を数えて仕分けすることができるように工夫している。

役場職員との回覧物仕分け作業

② 町内会配布物仕分け作業の成果と課題

ア 成果

・手早さと正確さが求められる作業のため、生徒は社会で働くイメージを持ちやすい活動となっている。

・生徒の感想は、「はじめは緊張しました。班ごとに分ける枚数が違うので間違わないように集中力が必要です。役場の方と話しながら作業しなければいけない場面もたくさんあり戸惑って手が止まってしまうことがあった。」、「枚数を数えるのに時間がかかってしまった。」、「時間があっという間にたっていた。またやってみたです。」などの反省や意欲の向上を示す内容であった。

・学科の作業学習では、手早く正確にできる生徒も、仕分け作業となると、正確に枚数を数えて記憶する能力が求められ、作業が進まないことがあり、生徒の新たな課題の発見と生徒による主体的な努力へのきっかけ作りになった。

・役場職員から、直接に感謝の言葉やお礼の言葉をいただくことにより、生徒の自己有能感が向上し、仕分け作業で明らかとなった自分の課題について、校内の作業学習でさらに取り組むようになるとともに、社会に出て働くことへの意欲の向上につながった。

・平成２７年度までは、町内会長が町内会配布物の仕分けを行っており、２８年度から役場が担当することになり、業務量が増大したことから、本校生徒の仕分け作業への参加によって、作業量と作業時間が軽減され、双方にとって利点のある活動となった。

イ 課題

・３学科共通の作業として実施をしているが、回数に限りがあり、新たな「流通・サービス」関係の作業の切り出しが課題となった。

・学科の作業学習とのバランスを取りながら実施するため、全ての生徒が同程度に経験することは難しいということが課題となった。

(2) 町内公共施設等の環境整備

① 町内公共施設等の環境整備の工夫

今金町内の公共施設等（町民センター、総合体育館、健民グラウンド、今金八幡宮等）の清掃活動に９月に３日間の日程で２学年作業強化日の作業として取り組んだ。

実施に当たっては、日頃利用することの多い施設を中心に、町民の目に触れて交流が広がることが期待される施設を選ぶとともに、清掃会社の清掃マニュアルに基づいて、事前に校内で環境整備の方法を学習し練習した後、公共施設での環境整備を行うようにしている。また、施設を管理する今金町教育委員会と連携を図りながら、日程調整や作業内容を調整して実施している。

町民センターの環境整備

今金八幡宮の環境整備

②　町内公共施設等の環境整備の成果と課題

ア　成果

・日頃から支援をいただいている今金町役場が所管する施設の環境整備を行うことにより、生徒は社会貢献活動の喜びを味わうとともに、施設を使用する人に喜んでもらえるように作業することの楽しさを感じることができた。

・役場職員や管理者から、直接に感謝の言葉やお礼の言葉をいただくことにより、生徒の自己有能感が向上した。

イ　課題

・学科作業がものづくり作業のため、学科作業とのバランスをとって実施することが課題となった。

・環境整備の方法について、専門業者から指導を受けて、より質の高い環境整備を行うことが課題となった。

健民グラウンドの除草作業

除草後のグラウンド

３　今金町総合福祉施設での車いす清掃、レクリエーション補助作業、公共施設の環境整備等（平成２９年度）

町内会配布物仕分け作業を継続するほか、公共施設の環境整備を２学期から毎月１回実施している。そして、今年度からは総合福祉施設での車いす清掃を開始し、レクの補助についても９月末から取り組んでいる。また、町内の認定こども園で雪遊びの迷路づくりや今金小学校の花壇の環境整備などを不定期で行っている。

(1) 今金町総合福祉施設での車いす清掃

①　総合福祉施設での車いす清掃の工夫

今年度５月から毎月1回（水曜日午後）に1学年の各学科から４～８名が、輪番で実施している。施設には車いすが４０台以上あり、これまでは施設職員が毎週水曜日に１０台前後ずつ車いす清掃を実施し、全ての車いすを１ヶ月に１回前後清掃するようにしていた。ほこりや食べこぼしなどが付着していることが多く、１台の清掃に３０分近くかかることもあり、人手が必要な業務となっていた。

実施に当たっては、福祉施設職員から清掃のポイントとして、車いすの操作の仕方や汚れやすい部分、安全で手早く丁寧に清掃することなどについて説明を受け、生徒は作業のポイントを意識して丁寧に清掃することを心がけて作業を行っている。車いす清掃を行う時間は、１回９０分であり、一人３、４台の車いすを清掃する。生徒による車いす清掃により、福祉施設職員が毎月４回清掃する業務が２回に減った。

車いす清掃

② 総合福祉施設での車いす清掃の成果と課題

ア 成果

・何度か経験している生徒は、初めて取り組む生徒に自分の意識していることやどのように作業を進めれば良いかなどを伝える場面が見られた。
・きれいになった車いすに乗ってもらいたいと、はりきって作業する様子が見られた。
・清掃作業中に声をかけられたときに、コミュニケーションすることができるようになった。
・利用者さんから、「きれいになったよ。ありがとう。」と言われて「すごく嬉しかった。」などの感想を持ち、自己有能感の向上につながった。
・働いて人に喜ばれる楽しさを実感し、校内作業への意欲が高まった。
・生徒からは、「今日は何台も掃除することができませんでした。次はもっと掃除する台数を増やしたい。」という意欲に溢れた感想があった。
・生徒による車いす清掃が、福祉施設職員の業務の効果的な補助活動となった。

イ 課題

・学科作業がものづくり作業のため、学科作業とのバランスをとって実施することが課題となりました。
・学科の作業学習とのバランスを取りながら実施するため、全ての生徒が同程度に経験することが難しいことが課題となりました。

(2) 総合福祉施設での高齢者デイ・サービス利用者のレクリエーション補助作業

① 総合福祉施設でのレクリエーション補助作業

福祉関係の職業に興味・関心がある生徒を対象に、今金町社会福祉協議会が行っている高齢者デイ・サービス活動のレクリエーション補助作業に、２学期９月末から毎月1回程度参加している。レクリエーションは、的当てなどの簡単な内容であるが、用具の準備や得点表の記載、利用者さんの移動補助などを行っている。

② 総合福祉施設でのレクリエーション補助作業の成果と課題

ア 成果

・利用者との関わりを通して、普段の生活でも話す速度や相手への伝え方などを意識するようになり、相手が聞きやすい速さや相手の話をよく聞いて話題を広げるなどの会話の仕方が身についてきた。
・福祉施設職員のレクリエーション活動の補助をする際、事前・事後の打ち合わせや活動中のコミュニケーションを通して、自分が将来福祉施設で働くことを 具体的にイメージして、自分にはどのような力を身に付ける必要があるかを考えることが増えてきており、学校生活でもできることを増やそうと努力するようになった。

レクリエーション補助作業

イ　課題

・１対１の会話が多く、生徒は聞き役に回ることが多い状況にある。相手の話を聞くときのあいづちの打ち方や返答の仕方などのコミュニケーションスキルを一層指導する必要がある。

・仕事で人と関わるときに、どこまで自分のプライバシーを伝えてよいかという公私の区別を理解することがまだ難しい。公的な場面で話すことが可能な内容と話してはいけない内容の区別を具体的に指導する必要がある。

・利用者の状況をよく観察して動く必要性がある仕事のため、高齢者の立場に立った介助や接し方などや介助に必要は体力を付ける必要がある。

・命を預かる仕事でもあるので、参加生徒が介護関係の職業に希望する場合には、在学中に介護の基礎となる部分の知識を学ぶ場の確保を検討する必要がある。

(3) 町内公共施設の環境整備

①　町内公共施設の環境整備

学校のワックスがけなどを行っていただいているメンテナンス会社から講師を派遣していただき、屋内体育館で床の清掃作業の仕方や留意する点などについて、平成２９年１１月に学年ごとのグループに学習を深めた。生徒たちは、専門的な清掃方法が日頃行っている校内清掃とは異なることに驚き、意欲的に練習に取り組んでいた。

②　町内公共施設の環境整備の成果と課題

ア　成果

・外部講師から学んだ清掃作業を校外の公共施設で実践することができ、自信を深めるとともに、日頃からご支援いただいている今金町の公共施設の美化活動に貢献することができた。

・外部の方から簡単に指示を出され、確実な仕事をするためにどのように進めるか、時間内に終わらせるための時間配分など、指示の後には自分たちで考えて仕事を進めなければいけないという会社に近い形態での経験をすることができた。

・普段清掃している場所とは異なる場所で、しかも異なる方法で清掃を行うということは、日常の掃除の流れとは異なるため、何をすべきか考えたり、より良い方法を見つけて工夫したりしながら仕事をする経験を行うことができた。

・報告・連絡・相談など、普段やって取り組んできた場に応じたコミュニケーションを校外の公共施設での清掃作業の場面で、卒後の就労をイメージして活用することができた。

・共生社会を実現していくための足がかりとして、地域の方々に生徒の活動を知っていただく機会となった。

総合体育館の環境整備

イ　課題

・単に環境整備だけを特設しても、“単に掃除をする”だけになってしまうばかりか、「できた。」という間違った自己評価しかできない環境になってしまう可能性が高くなる。

・外部の方からは好意的な評価をいただくことが多く、指導者側が普段の作業学習からどのような分担でどのようなことに留意して作業を進めるのかについて協同的な課題解決の方法を生徒に丁寧に指導し、生徒が自己の課題を意識して主体的に取り組み、社会の「現場」での作業を通して課題解決することができるように、参加する生徒の絞り込みと事後の振り返りを丁寧に行う必要がある。

（教務主任　金子　亘喜）

〔模擬株式会社 IMAKANE　FACTORY　営業部長〕

資料１

模擬株式会社　IMAKANE　FACTORY　定款

第１章　総則

（名称）

第１条　当会社は、模擬株式会社　IMAKANE　FACTORY と称する。

（目的）

第２条　当会社は、生徒の製品生産、販売実習と受注作業を目的とし、次の業務を行う。

１　各学科の製品生産及び生産品の販売

２　商品開発、開発商品や仕入れ商品の販売

３　学科共通作業（環境整備、流通・サービス、食品加工）

４　受注作業（地域課題を解決する「地域グループワーク」〔イベント企画・運営など〕を含む。）

５　その他、前号に付帯する業務

第３条　当会社は、瀬棚郡今金町字今金４５４番地１
北海道今金高等養護学校内に置く。

第２章　株式

（株式の原資）

第４条　当会社の発行する株式は、ＰＴＡからの出資金を原資とし、当面の間は株券の発行は行わず、ＰＴＡが模擬的に発行したこととする。

（株式の総数）

第５条　当会社の発行する株式の総数は、生徒数と同数とする。

（１株の金額）

第６条　当会社の発行する額面株式の１株金額は、５００円とする。

（株式の取扱規程）

第７条　当会社の株式の名義変更、その他株式に関する事項は、取締役会（ＰＴＡ役員会）の定めるところによる。

（株主）

第８条　本校に在籍する生徒は、全員が一人一株の出資をＰＴＡより受け、全員が株主となる。新入生は入学時に株主となる。

第３章　株主総会

（招集時期）

第９条　当会社は、株主総会を IMAKANE　FACTORY 総会として、毎決算期の３ヶ月以内に招集し、臨時株主総会は必要に応じてこれを招集する。

（招集者及び議長）

第10条　株主総会は、取締役会（ＰＴＡ役員会）の議決により、取締役社長（ＰＴＡ会長）が招集し、その議長は総務部長（教頭）とする。

２　取締役社長に事故のあるときは、取締役会においてあらかじめ定めた順序により、他の取締役がこれに当たる。

（招集範囲）

第11条　招集範囲は取締役社長、副社長、取締役、監査役、顧問、総務部長（教頭）、営業部長（教務部総務担当）、学科長とする。

（議決の方法）
第12条　株主総会の議決は、出席した株主（生徒）の議決権の過半数を持って行う。
（議事録）
第13条　株主総会の議事については、議事録を作成するものとする。議事録には、議事の経過の要領及びその結果を記載し、議長がこれに記名押印保存するものとする。

第４章　役員
（定員）
第14条　当会社の取締役会に取締役６名以内（ＰＴＡ役員）、監査役２名以内（ＰＴＡ監査）を置く。
（選任）
第15条　取締役及び監査役は、ＰＴＡ役員とする。
（任期）
第16条　社長、取締役、監査役の任期は１年とする。
（役職）
第17条　取締役会は、その決議をもって取締役の中から代表取締役を定めることとし、ＰＴＡ会長がその任に当たるものとする。

第５章　取締役会
（取締役会の招集）
第18条　取締役会（ＰＴＡ役員会）の招集通知は、各取締役（ＰＴＡ役員）に対して、会日３日前に発する。
（招集者及び議長）
第19条　取締役会は社長が招集し、その議長は総務部長（教頭）とする。
（議決の方法）
第20条　取締役会の議決は、取締役の３分の２以上が出席し、出席取締役の過半数をもって行う。
（決算）
第21条　取締役会における議会（ＰＴＡ役員会）は、１月１日より１２月３１日までとし、毎事業年度終わりにおいて決算を行う。
（顧問）
第22条　今後の町内での関係機関と連携した事業の拡大・発展等を考慮し、顧問団を置く。

第６章　組織
（構成員）
第23条　取締役社長（ＰＴＡ会長）、副社長（校長）、総務部（全体調整と総括）、営業部（販売実習総括、仕入れ計画・在庫管理・販売計画・予算決算、受注生産・受注作業の窓口）、生産部（新商品の開発・効率的な生産・検品）で組織を構成する。
２　総務部は、教頭（総務部長）、教務部総務担当（渉外）、各学科長で構成する。
３　営業部は、教務部総務担当（営業部長）、各学科長のほか、各学科から学科代表の１・２・３年生数名で構成する。
４　生産部は学科主任代表（生産部長）、各学科長、各学科から学科代表の１・２・３年生数名で構成する。

第７章　出資金
（取扱）
第24条　ＰＴＡからの出資金は、「教育活動援助費」としてＰＴＡより支出し、商品の仕入れ原資とし、仕入額での販売を行い、出資額と同額をＰＴＡ会計に戻入する。

付則

（模擬株式会社）

第１条　当模擬株式会社は、北海道今金高等養護学校の実習を目的とする。

　　したがって、指導教員の指導監督の下、経営する。また、定款その他の規則の改廃は、学校長の承認を受けなければならない。

　以上、模擬株式会社 IMAKANE　FACTORY を設立するために、この定款を作成、発起人が次に署名する。

平成　　年　　月　　日

発起人代表　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（ＰＴＡ会長）

発　起　人　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（ＰＴＡ顧問：校長）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（ＰＴＡ副会長）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（ＰＴＡ副会長）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（ＰＴＡ事務局長：教頭）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（ＰＴＡ会計：事務長）

資料２

組織図・業務内容

取締役社長（ＰＴＡ会長）

副社長（校長）

総務部

メンバー：**総務部長（教頭）**、教務部総務担当（渉外）、各学科長

業務内容：全体調整と総括

営業部

メンバー：**営業部長（教務部総務担当）**、各学科長、各学科から学科代表の１・２・３年生数名

業務内容：販売実習総括、仕入れ計画・在庫管理・販売計画・予算決算受注生産・受注作業の窓口

連携 ⇔

生産部

メンバー：**生産部長（学科主任代表）**、各学　　科長、各学科から学科代表の１　　・２・３年生数名

業務内容：新商品の開発・効率的な生産・　　検品

諸会議

会議名	メンバー	内　容
定例学科長会議 （毎月１回） （月曜日第２校時）	校長・教頭・教務部長・学科長 （模擬株式会社経営会議）	・全体の経営企画と調整、報告、改善
営業部会議 （毎月１回、放課後）	各学科長、各学科から学科代表の１・２・３年生（班長）	・各学科の作業計画・実習計画と改善 ・販売実習総括、仕入れ計画、在庫管理、販売　計画、予算決算、受注生産・受注作業の受付
生産部会議 （毎月１回、放課後）	各学科長、各学科から学科代表の１・２・３年生（班長）	・新商品の開発、効率的な作業体制や方法の検　討、正確な検品方法の工夫
学科会議 （学年ごと）	学科長、班長	・営業部会議と生産部会議の報告と協議 ※協同学習の活用

資料３　　生産部・営業部班長　各学科長又は担当教師用

IMAKANE　FACTORY商品管理システムガイド

模擬株式会社 IMAKANE　FACTORY 総務部

１　入庫～「流　通・サービス」（学科共通作業）

(1) 入庫作業

入　庫

（生産部班長・各学科長又は担当教師）

○　**班長：「入庫書」をつくる。**

※数が多い場合、他の生徒も協　力する。

○　**製　品**

・**保管場所に運び入れる。**

入　庫　書

（製品を保管場所に収める書類〔プリント〕）

記入日	平成　　年　　月　　日（　　）
記入者	
管理者	印

①	学科名	
②	製品名	
③	色	
④	サイズ	
⑤	単　価 （１ケいくら）	円
⑥	備　考	個　数　　個

入力完了チェック	

(2) 荷受け・バーコード発行

荷受け・バーコード発行

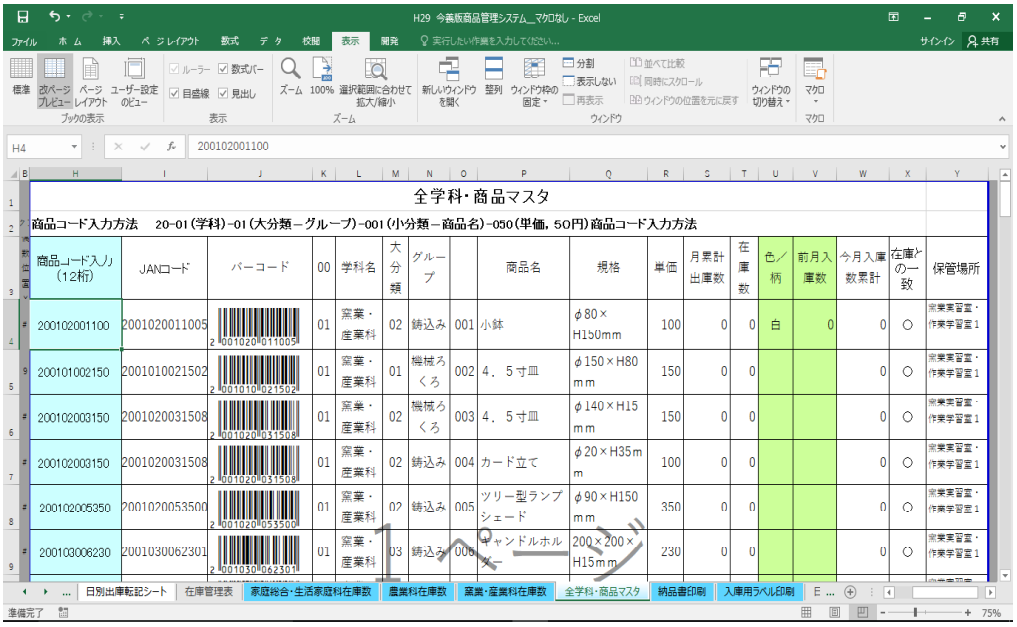
（各学科長又は担当教師）

1　各学科長又は担当教師：「全学科・商品マスタ」に入力

・新　製　品→製品データを入力

・既存製品→色／柄、前月入庫数（現状の在庫数）を入力（薄黄緑色の行）

・「全学科・商品マスタ」のデータを全行コピーし、生徒用の黄色いシートの「全学科・商品マスタ参照一覧（生徒用）」に全行貼る。



※<u>入力するとき、セルにカーソルを合わせて左クリックしたとき、数式バーに関数が出るセルには、入力しない。</u>

※生徒が入力するシートはシート見出しが黄色の３枚のみ。

→**<u>「全学科・商品マスタ参照一覧」、「入庫入力シート」、「出庫入力シート」</u>**

※教師が入力するシートは、スカイブルーのシート見出しのみ。

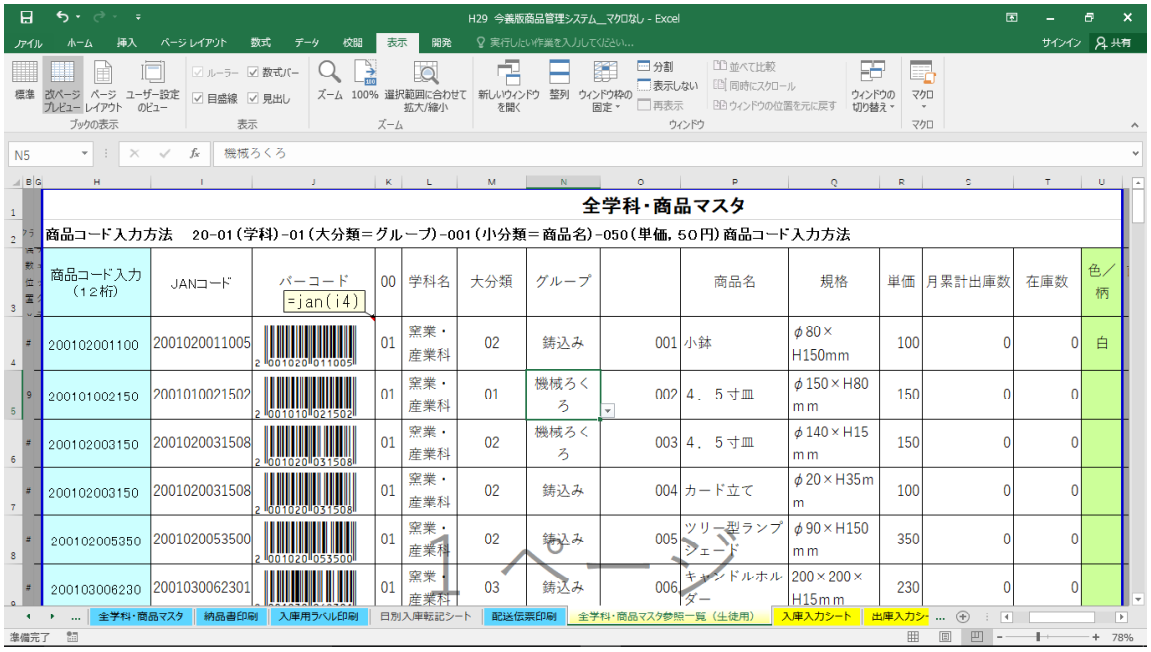
→・「全学科・商品マスタ」（製品データ入力）「入庫用ラベル印刷」（商品ラベル印刷）、「納品書印刷」（入庫時に印刷して営業部班長に渡す）、「配送伝票印刷」（出庫時に印刷して生産部班長に渡す）

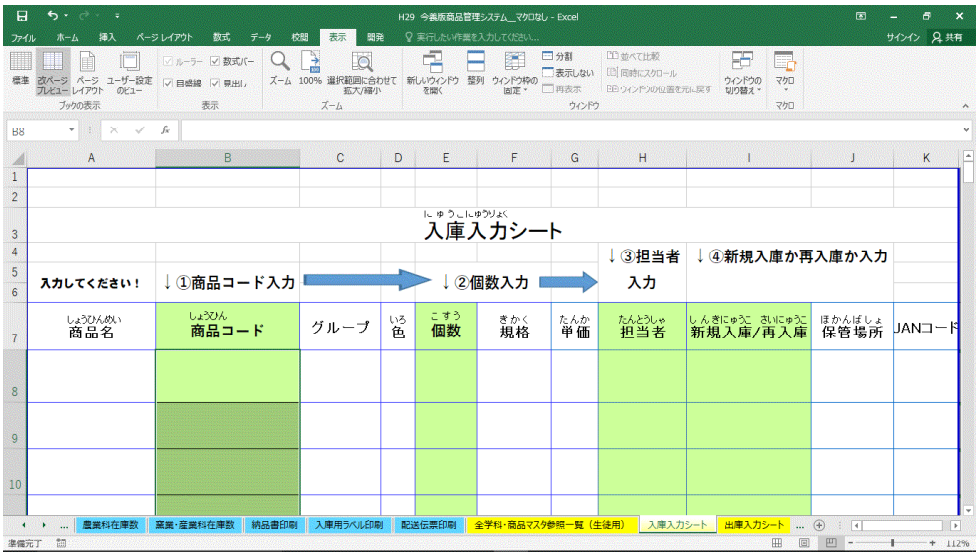
※「窯業・産業科在庫数」「農業科在庫数」「家庭総合・生活家庭科在庫数」は、当該日の在庫数を表示する。

荷受け・バーコード発行
（生産部班長）

2　班 長：「全学科・商 品マスタ参照一覧」（シート見出しの色が黄色）のシートを見て、入庫する製品の商 品コードを「入庫入　力シート」に入　力（コピーペースト）する。

①　商 品コード　　※①を入　力すると、商 品 名、色などが表示される。
②　個数合計
③　担当者　　※学科・学年でプルダウンリストから選ぶ。
④　新規入庫／再入庫　　※売れ残りは再入庫する。

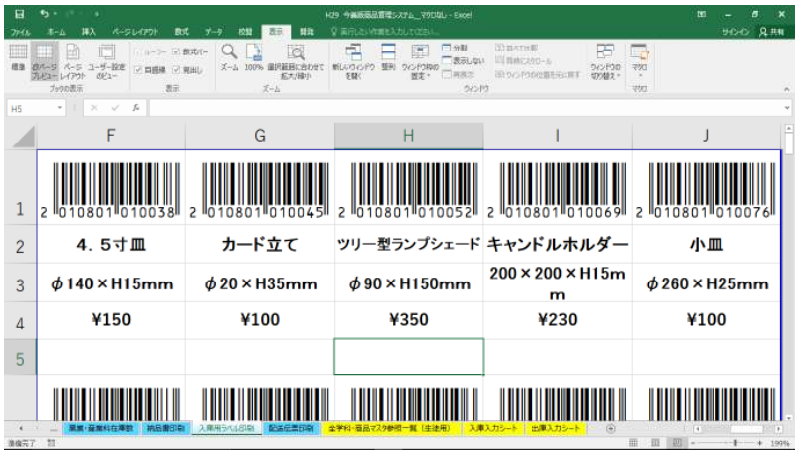




荷受け・バーコード発行
（各学科長又は担当教師・生産部班長）

3　各学科長又は担当教師：「入庫用ラベル印刷」シートで商 品ラベルを印刷する。

4　<u>班 長：商 品ラベルを製品に２枚ずつ貼る。</u>

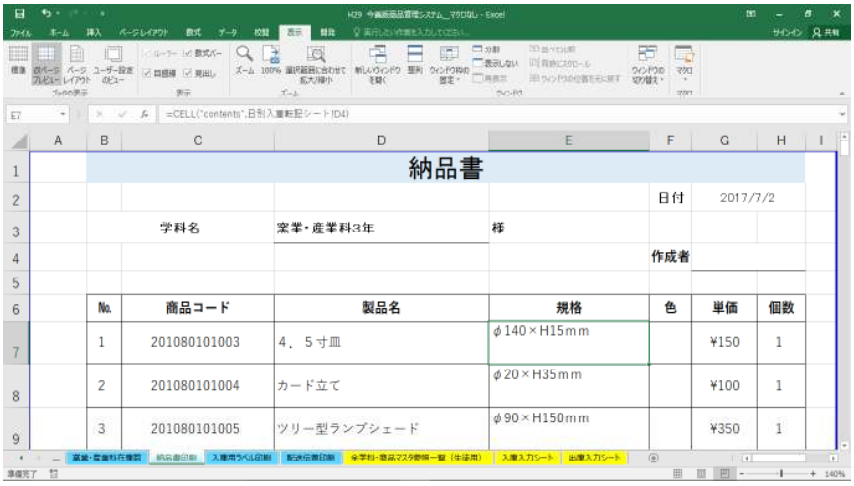


荷受け・バーコード発行
（各学科長又は担当教師・生産部班長）

5　各学科長又は担当教師：「納品書印刷」シートで納品書を印刷する。
　　また、各学科の「〇〇科在庫数」シートで在庫一覧表を印刷する。

6　<u>生産部班長は「生産部ファイル」に「入庫書」・「納品書」をとじる。</u>
　　<u>生産部班長は、営業部班長に「納品書」と「〇〇科在庫一覧表」を渡す。</u>
　　<u>営業部班長は「営業部ファイル」に「納品書」と「〇〇科在庫一覧表」をとじる。</u>

7　<u>班 長・各学科長又は担当教師：製品を保管場所に入庫する。</u>



2　出庫～「流　通・サービス」（学科共通作業）

出　庫

（営業部班長・各学科長又は担当教師）

○　**班長：「出庫依頼書」をつくる。**

※数が多い場合、他の生徒も協　力する。

出庫依頼書

（製品を保管場所から出す書類〔プリント〕）

記入日	平成　　年　　月　　日（　　）
記入者	
管理者	印

①	学科名	
②	製品名	
③	色　・サイズ	
④	出庫数	個
⑤	バーコード No.	
⑥	備　考	

入力完了チェック	

出　荷

（営業部班長・各学科長又は担当教師）

1　班 長・各学科長又は担当教師：出 庫 製 品のピッキング
・「出 庫 依 頼 書」を見ながら、製　品を 集 める。

2　班長：商品ラベルを製品から１枚ずつはがし、「出庫記録簿」に貼る。

出庫記録簿

（製品を保管場所から出したか確かめる書類〔プリント〕）

出庫日	平成　　年　　月　　日（　　）
製　品	
記入者	
管理者	印

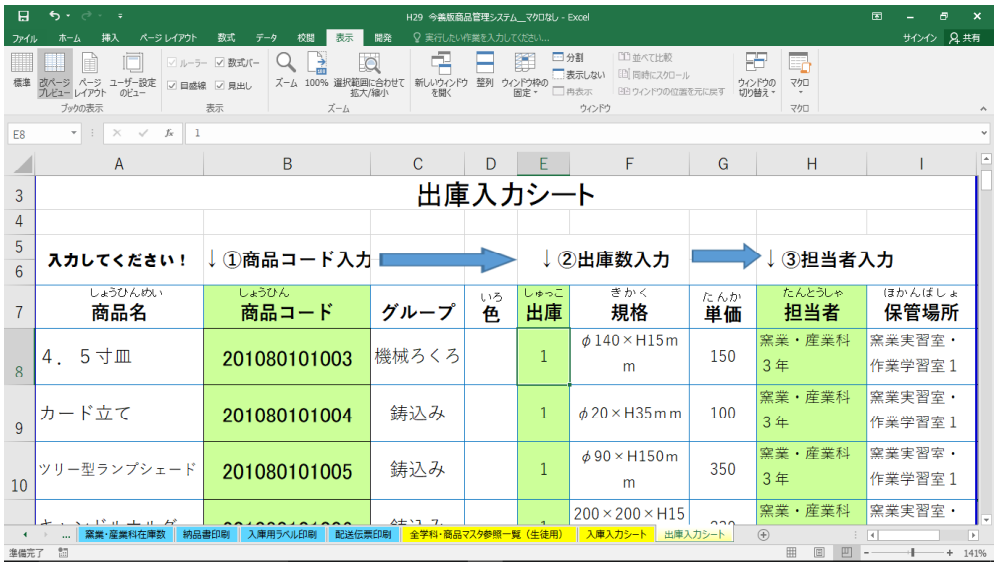
バーコードラベル（商品についている商品ラベルを１枚ずつはがして、下の表に貼る。）

1	2	3	4
5	6	7	8
9	１０	１１	１２
１３	１４	１５	１６
１７	１８	１９	２０

出　荷

（営業部班長・各学科長又は担当教師）

2　班 長 :「出 庫 入 力シート」に出庫製品を入　力する。



出　荷

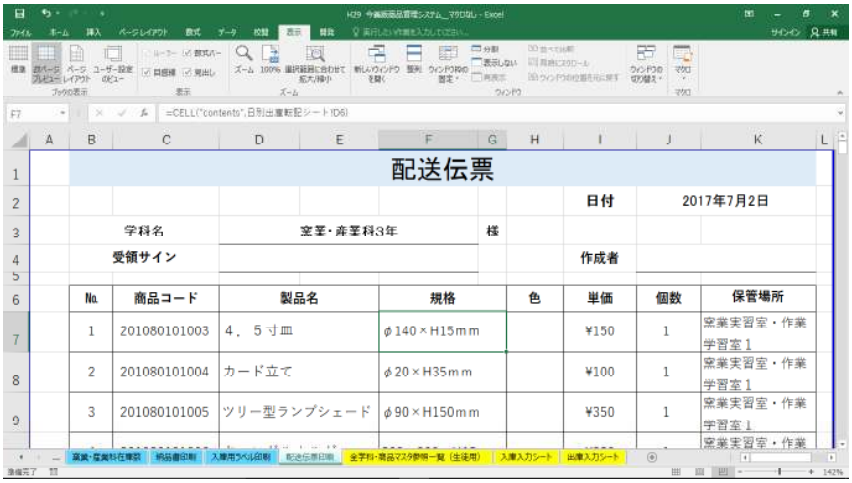
（営業部班長・各学科長又は担当教師）

3　各学科長又は担当教師 :「配送伝票印刷」シートで配送伝票を印刷する。

4　営業部班長は「営業部ファイル」に「出庫依頼書」をとじる。

営業部班長は、生 産 部班　長に「配　送　伝　票」を２枚 渡 し、そのうち１枚に受け取りサインを記　入してもらい、「営　業　部ファイル」にとじる。

5　生産部班長は「生産部ファイル」に「配送伝票」をとじる。



資料４

模擬株式会社の帳簿

１　なぜ帳簿を作るの？

会社の仕事は、何をいくらで売ったのかなど、帳簿（ノート）に書いておきます。そうしないと、いくらお金を使ったかわからなくなります。

簿記ってなに？

簿記は「お小遣い帳と同じです。会社はいくらで商品を売って、いくら利益があったか、売るための商品をいくら買ったかなどを帳簿（ノート）に記録して、他の人に話せるようにすること。」です。

そうすると、ＰＴＡも会社に出資（お金を出すこと）しやすくなります。会社が売るために買う（仕入れる）商品が買いやすくなります。

２　帳簿

営　業　日　誌

平成　　年　　月　　日

（　　）科　　学年（　　）番 氏名〔　　〕		
仕入先		
販売先	学校祭　　販売会 ひだまり	イベント（　　）

時間	営業活動内容	備考
8：00		
9：00		
10:00		
11:00		
12:00		
13:00		
14:00		
15:00		
16:00		
17:00		

振り返り	生徒	
	担当教員	（　　印）
自己評価	１　よくがんばった　　２　おおむねがんばった　　３　ふつう ４　あまりできなかった	

提出先・担当教員（　　）先生

仕入明細書

平成　年　月　日

（　　）科　　学年（　　）番 氏名〔　　〕

仕入先（どこで買ったか）　①ワークショップいまかね　②（　　様）

仕入高（いくら買ったか）　（　　）円

仕入方法（どうやって買ったか）　（現金　・　委託販売〔あずかって売る〕）

商品番号	商品名	単価 （1ヶいくらか）	個数 （商品の数）	金額 （ぜんぶで　いくら）

営業部長（　　）

担当教員（　　印）

商品番号
① 窯業製品（皿、カップなど窯業科・産業科の製品）
② 農産品（野菜・花）（タマネギ、花などの農業科の製品）
③ 縫工製品（エプロンなど家庭総合科・生活家庭科の製品）
④ 紙製品（かみすきで作った家庭総合科・生活家庭科の製品）
⑤ 織工製品（織機で作った家庭総合科の製品）
⑥ 石けん
⑦ アクセサリー
⑧ 仕入商品（売るために買ってきた商品）

売上明細書

平成　年　月　日

（　　）科　　学年（　　）番 氏名〔　　〕

販売先　（どこで売ったか）　　（　　）

売上高　（いくら売ったか）　　（　　）円

商品番号	商品名	単価 （1ヶいくらか）	個数 （商品の数）	金額 （ぜんぶで　いくら）

営業部長（　　）

担当教員（　　印）

商品番号 ①　窯業製品（皿、カップなど窯業科・産業科の製品）

②　農産品（野菜・花）（タマネギ、花などの農業科の製品）

③　縫工製品（エプロンなど家庭総合科・生活家庭科の製品）

④　紙製品（かみすきで作った家庭総合科・生活家庭科の製品）

⑤　織工製品（織機で作った家庭総合科の製品）

⑥　石けん

⑦　アクセサリー

⑧　仕入商品（売るために買ってきた商品）

入　庫　書

（製品を保管場所に収める書類〔プリント〕）

記入日	平成　　年　　月　　日（　　）
記入者	
管理者	印

①	学科名	
②	製品名	
③	色	
④	サイズ	
⑤	単　価 （１ケいくら）	円
⑥	備　考	個　数　　個

入力完了チェック	

出庫依頼書

（製品を保管場所から出す書類〔プリント〕）

記入日	平成　　年　　月　　日（　　）
記入者	
管理者	印

①	学科名	
②	製品名	
③	色　・サイズ	
④	出庫数	個
⑤	バーコード №	
⑥	備　考	

入力完了チェック	